

DOC 473

261

261

松岡外相演説集

証據書委員番号 第四七三号

外交問題研究會編輯  
日本國際協會發行

概論

東來我が國の隆國以來の傳統は、大體は「八紘一宇」即ち  
 道義を世界に布き、万民を「各々其の好意得しめ」と  
 するにありて、是國の外交は其の根本に於て是等  
 の陽を以て、大體を造徹せり。この大體を以て、  
 實現せんとす。聖業の遂行に因て、重大な役割を演ず  
 べきことと論じあり。今外交上現實の問題として  
 我國の現状を考へれば、日本の年々激増する人口を如何に  
 養ふべきか、又欧米三大陸（英帝國とアメリカ）に比して  
 著しく低い我國富の程度を如何に引上げべきか、と云ふやな  
 常に大きな問題が眼前に横たつて居るを知らず。此等の  
 問題を解決する爲政府は永年海外に於ける通商  
 貿易、移民、企業と云ふ如き方法に依り、然る國民の海外  
 発展を計らんとするを知らず。然るに欧米諸國は之に對し  
 日本移民の禁止若しくは制限、日本商品に對する高關稅  
 率附加等、其他種々の方法を以て之を妨害するを有す。  
 又現にいつ、あるを有す。  
 滿洲事變は日本精神の發揚にあり。又或る意味に於て  
 欧米諸國が日本日本の平和的發展を抑制する爲め  
 起る爆発であるといふことが出来り。

(第三十二頁)

Doc 473

實は然るに世界大戰此方、世界の和平と正義に於ける  
主として日支の關係、日支兩國の動きを具して觀察  
する、殊く一ツの見解を得て未來を有する事、一ツの見解は  
支那の繁榮の動向と其の益、其の禍福に關する未來を  
有する。夫れは此支那の繁榮に於ける吾等の支那の繁榮  
と其の事は一九世紀末、近頃の或は帝國の中心からと或は  
單に物質的な慾望からか、或は傳統的、或は實際的の感  
情乃至抗爭からとか、又は支那主義國の古に於ける實利  
的闘争からとか、いふ標榜戦争とは其の趣を根本から  
異にする所である。即ち今回の日支戦争、根柢は實に  
今までの如きものである。無論夫れ以外の種々のものと實に敘  
第三義的には或る原因を爲るに於けるものがあるが何とて  
其の根柢は夫れに在らず、其の事であることと其の事とを互に  
けりきりと把握し得れば厚くない。其の事は然るに三千年來  
或人達に就て論じると其の未來を有する。其れは我が國  
は飽く迄支那と和衷協力して東亞の全局面を以て振  
ふべきことと堅持するべきことを有する(第三回夏)

要するに日本は此の國內に於て政米が外に東亞に國土を  
併呑する、其の人民を征服する、搾取しようとするのは原  
及此に原住民を帝國主義に壓迫する解放し、彼等と親善  
とを假不代りに兄弟と云ふ可愛がり彼等と其の共此の  
關係を強めていこうとするものがある事。

皇國が斯様な政策に出るとするのには別に他國に氣遣ひを  
するものも現存する世界に於て其の力に感服して之を嘆服する方策等  
と有するものもいふものはなく唯 神を畏る、これを有する。

02





473

Doc

✓ 0.8

又政府は何か錯覚に落ち、その大衆が金で買収されて  
出た情報も、すべて金で買収された。この政府の野心的  
無闇に、乃至腐敗非道な態度は、彼を懲らしめ、反日を遂行  
して、彼らに充分発展せしめる道に万全の手配をせよ、  
更に中村文相を殺害する事件と云ふは、不祥事を自国に及ぼ  
すものである。それと未だ多くの外交政府の方針は、泰然  
自若と一向に動揺をしない。然るに満蒙の現地  
に於いて、日本と英米の同盟は、最早心づいて出来なくな  
る。その満蒙の争奪は、当然起るものと起る。  
我國民の血は、決して流さぬ。今から之を回顧する事は  
柳條湖の事件は、それ自身、実に日本精神の暴露である  
又戦争である。発端である。又之が、実は長之眼を、日本國  
民を自覚せしめ、日本精神、更生と共に、皇國日本の興衰  
存亡を懸念する門出に上り、めを、我々も、我々も、我々も、  
ある事。若し、そのことが、今満蒙は、誰が支配  
するものであるか。否、それとも、日本は今頃、何処に、  
彼に、我々がある。彼に、新秩序を、我々も、我々も、  
私は、今尚、悔然と、案、胸に、生、ずるのを、覚、か、ある。  
文相は、國際聯盟に提訴した。當時は、まだ我國の恥辱を  
避、國際聯盟に、主、義を、提、昇、し、若し、は、之を、通、電、を、  
ある、心、を、我々、に、思、わ、れ、た、事、が、一、成、り、な、る、  
た、事、である。國際聯盟は、極力、日本を、抑、へ、よう、と、する。そして、有、意、  
なる、以上、調査委員、會、を、極、力、に、派遣、する。



473

Doc

凡そ日本を被定扱ふに之を以て然し其當時より日本政府  
國民も甚だ先覺であられたる又定例二はがておられた。  
委員一行が盛風堂を兼り込んで来たのを拒みもゝなかつた。  
諸君はよまや、その意を以てない日本を以て心合せする  
まい。これが今を以てどうだろう。貴族の呼聲  
が判りやう、と云ふ風な振着顔で假令は来まいが  
又我輩を之を一蹴するだろう。かやうな度々見ると、定例  
の義に堪え得るはおもひ難い。我國民は今の皇國日本  
を有難い、すばらしい姿を仰ぎとつて、あつたやうに  
見せよう、此の國を愛を以てはなさない。若し  
健全な心で居ると、天を以てあやうな目に遭ふ事はない。  
一滴の血も流さず、指一本も動かさぬことの無い満蒙を  
リットン張を以て載せよう勸告に基き、まゝと國際  
管理の下に收容しやうと云ふ。  
凡そこれを見茶屋人を莫逆に之を以て國太の企みも  
大國に押し付けやうと云ふ例は人夫史上他にないだろう  
と思ふ。併し世の情勢がどうも思へば、それが彼等  
がけいからぬが又はかゝる調子で舉げてゐる。彼等  
即ちかゝる侮辱を自ら招いた日本が更なる其小の甚だ  
内閣を以て。私は少くとも我朝野も當時の姿を以て  
心掛けた一歩の罪は有ると思ふ。更生も亦彼等  
は日を迫りてけいさうと云ふ。之を以て遂に今國が  
勸告を拒んだ。即ち昭和八年三月三日は昭和八年三月  
十八日と云ふ大和民族の志を以てなす記念の日である。

206

20.7.

DOC

473

柳宗清の一聲に始まる日本精神の更生は、神皇正統  
の譽に依る完成を果さず。又昭和八年二月二十五日は  
皇國日本近世文明の一大主要特徴である偽善に向つて  
敢然と挑戦した日とて恐ろしく長く、世界史上に燦々たる  
光彩を放つことであらう。爲りしは其の苦勞年を補ふの  
途にせよ世界をにぎはふは此の日也。又日本はこの日  
偽善を現状維持の機軸に決定の致命傷を  
與へたのである。





建設の第一段階は、まず、又、世界新秩序の建設の第一歩をなすに在りて、世界文化による

473 可なり、地位は極めて重大であると言はねばならぬ、  
而して満洲事変の目的は、我々の民が天下  
錢意欲わして、ありませう、新秩序の建設を完成するに依り、初めて實現せられ  
るのである。満洲事変から今に至るまで、  
大東亞の要港と云ふは、もはや云はば、一体を為  
すものである。国下の支那事変が根本的に解決  
せられ、事に依り、初めて満洲事変と満洲建  
国との真の意義を發揮する。のである。  
又、大東亞新秩序の建設と我國の国内体制  
の整備と云ふことは、不可分の一体にあるのである。  
まず、国内に於ては、(体制)をこの儘維持しながら  
大東亞に新秩序を樹立せんとし、若くは更に進んで  
世界を包んで新秩序を建設せんことを夢せんも  
それは不可能である。我々が、既に、有  
形に、国体に根拠したる下民輔弼の政治体制  
を樹立し、万民を率ひ、心の奥底から、  
唯一の天皇に帰一し奉る、といふ、其の根本  
的なる全体主義に徹底し、以て、金匱に淵源  
する外、変政策を遂行する時に、幾んど大東亞

10.9

473

の新秩序 万世の新秩序が個々には一建設  
せられしものと確信するものである  
今も此の非常の秋に際会して、萬洲建ち  
意義に就て思想をめぐらし、建ちたものの情  
を回顧し、而して吾等臣民の前途と眼とを固  
きう直視し、眼を上げ、抱く人類の将来に  
想を馳せしむる、吾等の民は、其に奮起  
せしめ居るべきもの、吾等は、其に、  
新秩序は吾等の、この堅き信念の上に  
時艱克服に邁進せんことを期せしむるを  
りやせぬ

(永十一年四月二十三日)

No. 10.